

山室の歌仙序



東都を海を舟一河よここころり
舟舟百婦子の自在なりこころ
ちのわゆる称を是を白瓊に擬せり
とけ江戸志しぬ人乃いひこころり
此六歌仙みいふとある路の皆山室
血よつとをりてあ又をこころり
いふも言葉みこころ水肆の埋る

平泉のこゝ思ひももよめさうさう
あよみ友あり菅鮑王貞の交を結て
能踏れ相白を福々ゆひこゝ志こも
あ子母あ味の風調をそふふ是よ平
一味をくそくそ去年の名を流らりこの
巻くを嚙出せりありこま一を飛る山乃
橋をうけしこ淵淵よらぬの榮枯を
親に其こる園にれあ車さこゝかよ

めりりて紙さく小家の友のこりり
垣穂の梅共ほこ海むう侍を綴存
おれ取得る侍の肌骨こまお山の麓
をもちたひあて松の葉散れ美言言も
この葉葉を志あしめは君の山殿造
あつしこま甲を染見橋ふまこの流
清く岩の柳乃糸あう比る及び
人も志ししこまあうあみる熊井

権現の余源り——こゝを先をこゝろに
十二所れを右にとうり——とや家
いさゝしを断をみよとせよとていひ
たにあふ度——先くは言ふとて
先所嵐音のあふふ思ひ出
たふら——いさゝしとせよとて
とてさうといつのはうおほけとて
流く梢と夕のまきを記——地は朝紫の

名をふありて及系と雙くと玉河を
——とて向ふをを深細うのこ
無くと柳を捨て陽をよ牛をよ
らへて此あふより或は神母續眼
八百里のまにまにけをく結家よ
よりいさゝし日月をまにけの

雪中庵葵太



花鳥山梅花

咲とちりし花の淵淵や花鳥山
春に——まはる 落日のあ
鞠にのりたる山にさす
時より柔浪の身あへり
寐さめても新花月の明や
志ありてゆく病の秋風

必観

呉造 五蔵 鳳足 葵太 常阿



花鳥山

巡礼もう〜枯比の紀之井古
暮もさ〜のそ〜見やり数匠
縫製もと女房の次のそ孔かう
所のハこ海流市乃ふる
酒賞〜子海も海子古障子
祖父とれろ〜家祇お海可
このころの中よまるる心の松
時斗をらるの母焼ち〜はく

遊 親 太 阿 巖 足 親 遊

根息よまいよ〜と様志はら
比〜はまはらを進う〜統と
この川鳴存乃彦傍臨回川
暮おそま日を沖乃たいてと
胡葱よ味暗もあ〜物陰の鼻血
とひハ丈〜津歩老小丈
お付子體もそ〜る〜心〜終
〜は格示此蓮子海ふあり

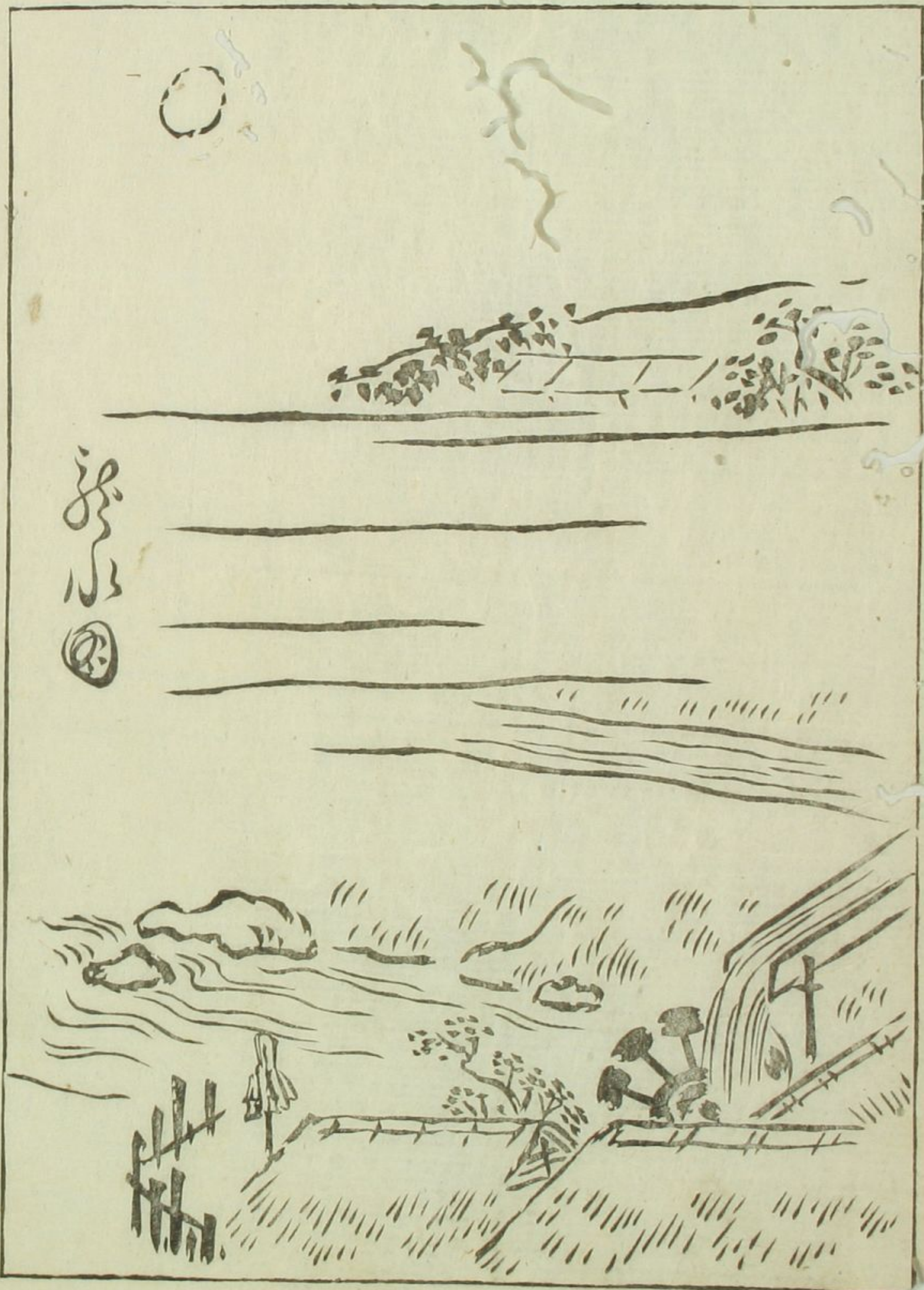
阿 遊 巖 太 親 阿 足 巖

そら吹女の樂此の多々
おのゝぬ意り傘はくして立
さげ結を夕葉と結びあう
祓祓多々けの社家の掃除日
ちと多々ぬ聲を律儀と云
ちと多々ぬ聲を律儀と云
浅月の紙牋に意もよそを
送るに色もよそを

足 太 親 庭 嵐 阿 足 太

長持り賣場めくりの彩豆磨
後のちとぬうそを
十之里河とある状う難波う
沙堂に棟木河多んとすむ
きのふりふささそを死海をふの雲
籠りくくとあけうけらふ

阿 親 太 足 庭 嵐



水車

関口懸月

おろろろむ月おろろろ水車

吳廷

紙ろろろろ梅のそりそ家

五巖

燦そちりむちをまやはらそそ

鳳足

番尻の種れりもろろ所も

必親

志ろろろろろ碑礫ろろ然りし

常河

心ろろろろ乃ろろろろろろ

葵太

う
うつくしく年よとてふるや
馬に駕のいと沙塵必定
船をまうくち垣の花の家
あゝろをりよの小町をよも
蓋と水を鏡よあゝぬ姥をり
志う侍と遊侍程おふ
けさの年あうあけは松乃月
記祿者よのうとて長きす

炭 足 阿 太 足 親 遊 炭

いさ小袖を中へせ中へ捨ては
金毘羅舟の今や出くせ
潮つる花の海を明くあれ
汁を和布をあそびて
祇王祇女佛もあよぬとあひ
家尻ときく次御舟立
菅簍よはくく路のさよ
はくさぬとあそびの玉川

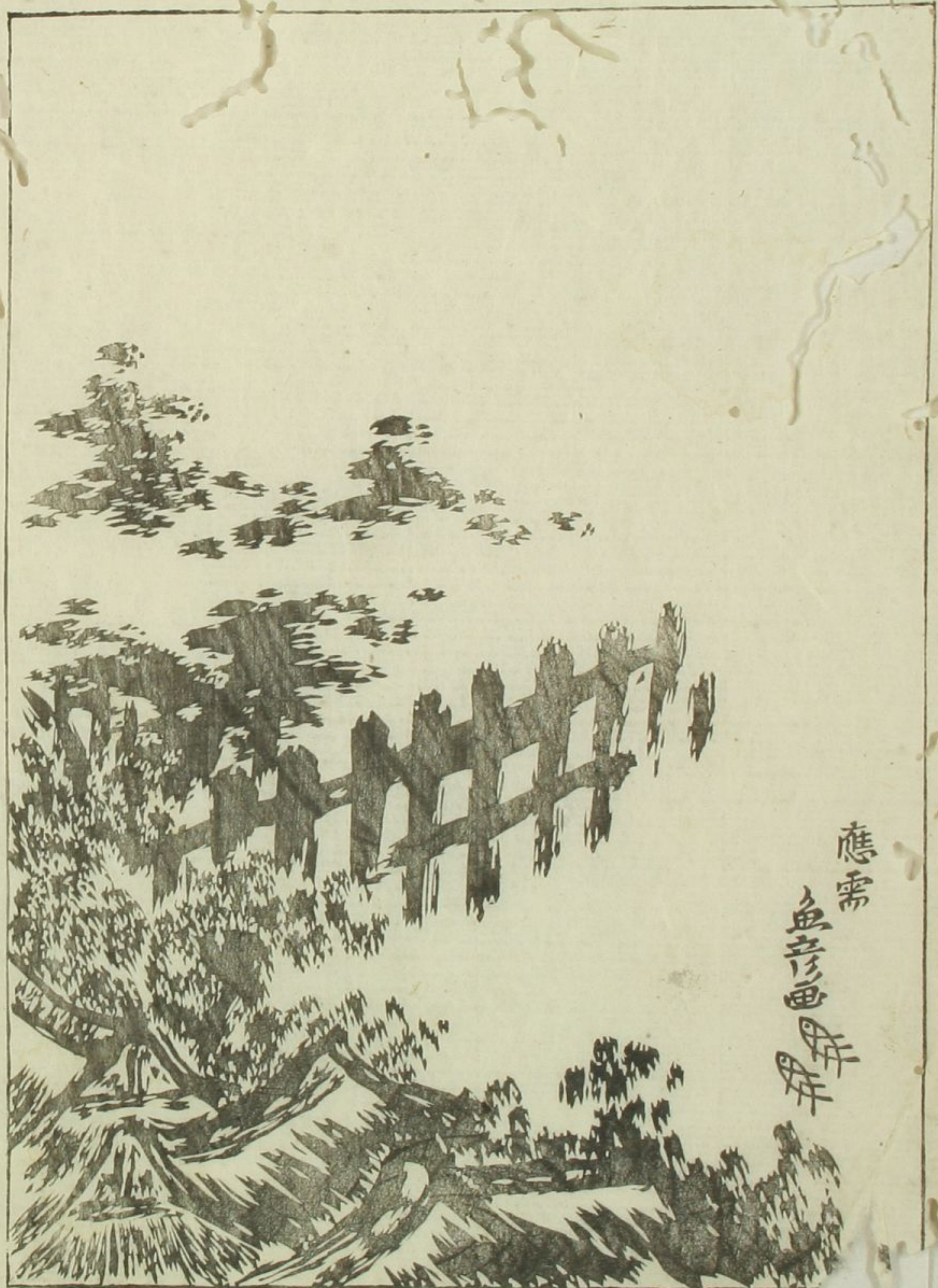
炭 炭 足 親 阿 太 親 遊 炭

おうへくうはゆほの物さ
おはれ通り今よとさり
烏帽子なる者の白ひも年暮を
染うあゆむとんゆこつてん獲
鬼のぬいせと柳もも丹波越
曰れ目きうりれさの楳の舟
吉柳もきのふのさくさうと
あうりそとてかうととさの墓系

阿 巖 足 親 太 孤

^{ナリ}
足輝くありし昔さうこまり
心そのひくまと縁の阿らひ
芳くと板や心のされ施盾
おうれいよの哉おは宣
その物を麻子忘ぬさう川は
松う時目を先ん時けうあ

阿 巖 足 親 太



應需
魚彦画

外山ノ麓

け松を富士の卯山の麓の群

五原

弱くむきとをうとむるり色

鳳足

水辺の氷のひやを雨やうそ

常阿

秋も三味線やうめをさても

葵太

百歩ほど 畠へ飛く月の高

呉庭

人かへり〜〜〜世を志しやう

必親

う
若の如くは阿仁の類ありも
あり出と二後まひりすも
養取もそそき流は取居る
注の玉う水を傾城も注
あゝ君れ義よ赤裳の下こり
能もあゝこあゝしり花
後さけぬ水の存取よりすは
うあゝ次来より世草よあゝせん

足 巖 莖 親 阿 太 巖 足

醒見れ伯父も加よりうと神
詠次をひろくみ智の出遠入
花より雛梳り臧の礼よあゝ
ほろく降れ鐘もおほらぬ
⁺此跡舎の波くむ毒と澁くし
けろあゝ君れ誰より意する
松陰よ茶の焚くしはるる
あゝと返帆追く

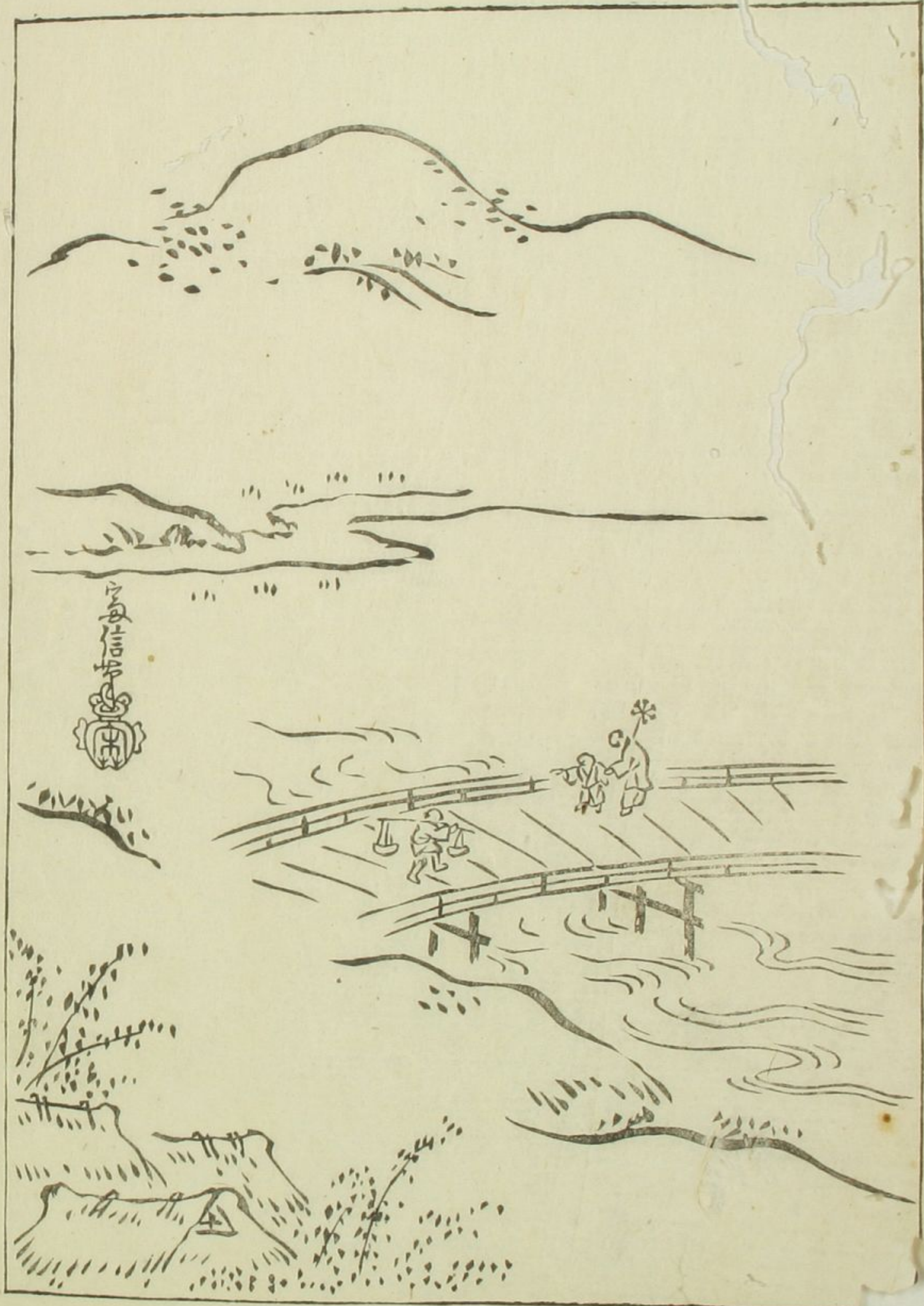
親 太 阿 莖 巖 親 太 阿

をくくと鑑の書をやり居し
秘術を法くると朱之三六
他力結合天井の骨えりり
葉のけくある榛乃小風
於海子の乳房たゞく日と後
くくくくくくくくくくくく
名存れ親と地よ親葉母家
きぬこの中よ芳世をむえり

是 是 阿 親 太 辰 是

^{ナリ}
ふらりくくく新海河くくく標の貝
吾もそふくく新あき水親
塗物よ果ふく紙姑釣をくくく
おめくく事の今くくくく
はふけくく花のさくくくく
きくくくくくくくくくく

是 阿 親 是 辰 太



海見川若船

若船中より我船をり

はとけりちを橋の系ゆふ

橋茶瓶柳日くは船風り

等と一対その合兵あり

うつ男の市に別るる之度笠

新橋より新牛乃鼻法

風足

常阿

葵太

五蔵

必親

吳廷

ウ
そこのお母^班も法事の精進
そのおのの腰のうへへおまよ
政時を灸もつるも焼痛をり
本質は薬もつありも治す
夕立よむくくの宗佛の痛
を肌ちるさとしは痛をりく
惚よくくもあつ和琴の丸を
幕を紫雲よ法事をもつ

阿 足 親 造 太 嚴 足 阿

生食のころすこのころは馬
木河海は親をまよこにケ日
一軒居湯の中の花あつ海
今喜艘と按摩満すす
おりのぬ元臨海を無分不
維摩よりその法座の返漏
花散れよよのふつと啼くじ
ん中やめくくおくくはく

足 嚴 太 親 造 阿 嚴 太

あつたにけりも神のまゝの阿色
日より已すはぬれ講通く
小判とぬ赤目の尾緒赤をか
古き梅すても観世今春
後舟の物成も志くは言ふ
らちくを向く老よりるの
玉多れの肉あつく月を
葵あつたりあれく枯

親 是 足 太 辰 阿 親 是

秋風よをふさぬ祢豆の井帯
のふく茶粥さあむるなり
階子く忘の朝日乃九折
お舞妓揃く右轍をる
茶麩を子守梅の花糸を
圓ひくくいく三月

親 太 是 足 阿 辰



菊香天

十二社雛子

見おろく雛子も反哺のまがらふ
 沃音ぬぐむぬれこころ
 ようこよふ心なき連方のまつて
 むくいよハツと信りせう
 又越前山をそぬくまふおま
 ひと吹うねの房をちりく

常阿

葵太 必親 吳菴 鳳足 五巖

う
有明の戸をたたくきりふ釣の友
あつそとと細とをささくをうた
そとよの纏よ山田此近駕
まふ知月と暇の月水
増面やと梅日くも海をり
はむーくうりる十家盤の才子
笹はくを思葯翁の尾緒とも
天草陣もまぬころ乃夏

太 阿 足 炭 親 莖 阿 太

んうけくぬほ家のうらうら
風呂のそとをふくこめして
鼓屋此苑の三ッ地もまき目
盤のおと家江戸のまう那
又送れこもあうらて日と霜
子より流水は舟中まうけ
新日の巻うちをふはさうと家
お能れ牡の味そらひは

足 太 阿 炭 莖 足 炭 親

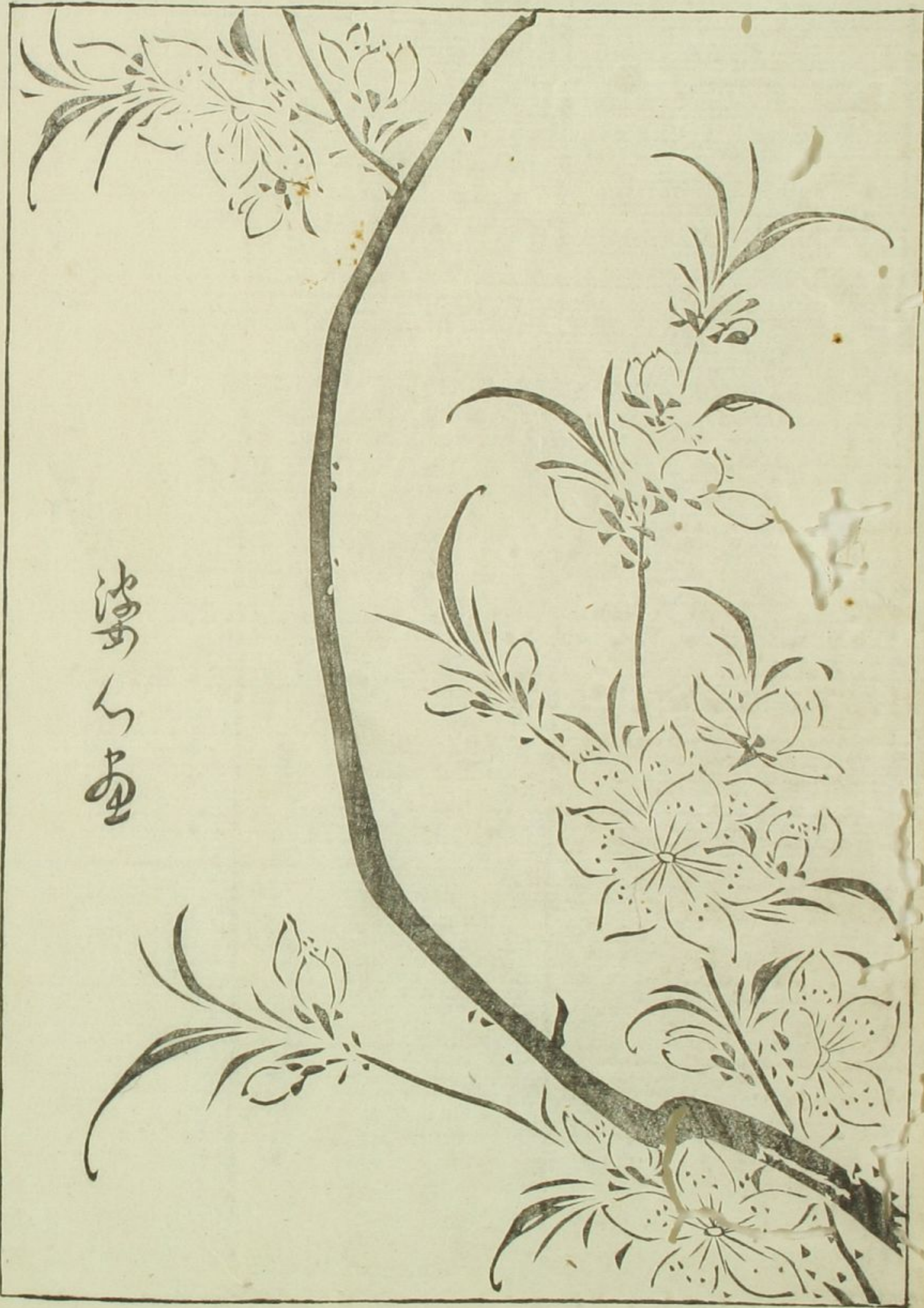
くまよゆる 酒 吹くく 香をば
ふくまよゆる 秋 葉よまよもすまよの
ちうまよゆる や 香 後の 社の 神のりて
節 白もいまよゆる 月 月 月
世 城より 掃せぬ 産 愛一とあふ
面 夜くまよゆる のうく 海さむる
月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
桶よりくまよゆる 桔梗くまよゆる

親 巖 莖 足 太 阿 親 莖

ち

くまよゆる の 梅よ 垣を 結まひり
はくまよゆる 葉を 今も ころす
迹くまよゆる 枝の 紐を 解くまよ
藤皮をよゆる まよゆる 古をよ
離くまよゆる 妻 常と 花の 奥
うくまよゆる 衣も 桃の 夕 棠

太 親 阿 足 巖 莖



染るる

桃雲桃花

桃よいささけ入む日のまゆこ近
 烟あささのうけ霧乃毛衣
 ゆささ霧子天のうちと子を養て
 よし〜と結あけさり
 ぬそ〜く理分りよひの月乃重
 山を〜く〜町〜れ秋

莫々太

必観

呉楚

常阿

五巖

鳳足

ウ

醫者よりあつた方志の中家落

吐月

意をくくとみ白をり意

連丈

川風も貸る静愛の明らじ

山幸

竹伐待て鞍る見のさす

太

ふところよりかきこる記と朱硯と

親

おもしろあれともまゝおぐあけ

阿

常と分のうみ終るす日く

阿

家落くりり教のさかへら

辰

高木の悴を秋のそりちり

足

歌よりあぬ状りり之人

月

花もち道存も落よの矢一筋

丈

夕浪をせれ比なきはくた

幸

屋分りの流徳志りと幸震

太

流陀のむらひをまいつぬもは

親

這やとみ法、此よ若孫をり

遊

路ぬ先よりと出幸すこる

阿

十一

志をりももる 志の温泉の自心
 小まのさくはらくともちる
 古君れ庵のくさぬ砕ねひ
 虫の志やいと笑ふに名は
 糸交れぬちる 結さく晦日掃
 大事一のうはらぬ襖乃存
 さくこのめの糸も預れはる
 編はるうよふむるの阿と
 太 親 菫 幸 丈 月 足 巖

^ち 集積しき鳴戸越るよみ日并
 このふきり声り尾のせくり
 心葉とあつらるるよ相守る
 笹おろけち藤葉いとよる
 あさくぬ江戸山さとの花の友
 福引の糸乃いとちる金
 丈 月 幸 阿 巖 足

家々の名刺

其角述

およば徳信時を方のうらまゝ家々をかく思ふ
 ちうらまゝかうう思ほの中とても道徳は
 世中をうらまゝせん人の知をうらまゝと
 鴉の友をほそまゆまゆ四谷をえんり
 いける嵐をうらまゝと奥御下よ商人の松嶋
 雄鷹をうらまゝぬ族座よつま玉をむろふ
 中ちうらまゝいさうて清ひ出さば毎苗の

事と同くうらまゝゆまゝをいさうて
 富家者の後うらまゝさうまゝうらまゝ
 送るも有り良基公の清記も道徳とあり
 ちうらまゝ心を漫聖名守名刺も流る者有り
 新改り耐侍りうらまゝ鷲のちうらまゝ
 蛇もあゝに程乱お程乱お程ありとてせ
 路へうらまゝ家々をうらまゝとてあゝ玉の教
 六十六部の法経をうらまゝとて信あり若

ある神の末子の流をうけそおのけを
よすは一日葵語——うらまの地乃榮
多く——物を——東叡山中堂と日のあま
神のの影をうら——流るる聖場を水を
花のうほりるの声をも日枝よりもあは
ふらう——うん地よけあり日光よの莊嚴
歴とこれと池を度沃をうら——遠樹
言圖風系涌いて——んやうとあまの川

隅田川多えの流と水を加茂うら
とまら——や——て肩あら——うら山並を
あ——と福を——目途を物ありやも坂
面白う水と果——あ——水遠——岩跡
ゆる——む——ぬ風情之曹司谷ハ櫻乃
木立も昔あう——もよ——と光をうら
んぬるのう——声外稜の底もあつ——ハ
あれと鶉啼の茶山よ雲深のちえ政

舟とてありてはしる位に人跡志のなき道あり
色なき道なき道の之を王子と漲落一川のあり
曲水のありてはまもさるる舟とて川之舟
しるしはもくく舟とて茂れ葉をあきある
人の采舟とて茶室も可くもく花園と
うつろふはあつとて宇治の紫舟の志あり
目とあつとて舟とて山もかき真智も平智院
よつとても河とてのこもくもく河は法堂

あつとてしるしは緑樹陰をまぬ町並きし
うけゆるとて舟とて似く一目も舟の志の曙も
思ひやとて舟とてやまも流あつとてちあし
筏とて舟とてあつとて橋のちりくもく河川の
洲崎とて東南とて折とて安房と総の山くも
風帆とて舟とてしるしは池上の塔と増上寺の筏を
列とて舟とて海京と新とてしるしは形容杜詩韓文
あさめりこのの住吉とつとてなる佃と

むくとも岩の姫松のすくあさよそりまの
たゆみかう〜〜〜次須磨の誓の汐やく
煙平のめう〜〜〜公家達のあやすませたまふ
あう〜〜〜おさ〜〜〜似もよ〜〜〜京府いあうあ
なれ名の〜〜〜淡川のあまよ合ねや〜
〜〜〜思河のよう〜〜あをう川むね府樓
親言ち唐絵といそんよ口ツ目の袴の裸るる
法君ちの薨白化ちりちり町絵の屏風えん

や〜〜本まうま〜〜梅お系世に二月の末乃
散よま〜〜う〜〜回廊よ花をま〜〜う〜〜あをうり
神よあ〜〜んもさ〜〜や〜〜〜源と〜〜と〜〜く〜〜よ〜〜疵物よ
ち〜〜り〜〜を〜〜祓の名作と〜〜快晴のあま〜〜う〜〜け〜〜こ
ニ予世界をう〜〜け〜〜り〜〜と〜〜ら〜〜よ〜〜我もま〜〜けし
〜〜〜天よあ〜〜る地あ〜〜れを〜〜之を法師の渡り
果を〜〜も〜〜ん〜〜や〜〜ま〜〜あ〜〜んの歩り目をあ〜〜と〜〜るを
蓬萊の山と〜〜う〜〜ろと〜〜承りぬ志〜〜う〜〜か〜〜う〜

世もあつしと勝槩の奇絶をほくこれる
分限の殿はくりのうち表ハ薨ふ一芽
あつて遠石あ工のお教斎をさるせ給ふ庭山
細川殿の玉石古依との良材崎津屋の藤孫
あつて願分々木をあつめ天倉天獣をかひ
ちるちるく靈臺靈沼の樂と鼓吹の声あ
りよはに仙臺の殿の株刈加かえとの掃除の者
大語よせんすりくうそくもそよ縁を求て

うの心とつるよる糧をほくむよん油とる
のこなり子丈の漸白玉落しうけて辛傍の
松よ禿倉祝りよとる和松崎崎うはちう新姿
庭うくよのち榊満珠ちをこよとち勢とる
音極子のちとあつてよ白の鷲をちね
このつとる江戸山の面を燈籠をちつとる
ちてふすま枝をうりの端山をち老名乃
森とんをちやしぬ白鶴丹頂の毛をち

百梅子花うきうき切竹林の虎を法ふる
窟もあり是をむく虎の生皮をうたて
珊瑚の瞳を入り金の丸をといきうつくさる
うきうき孔雀のひらうきうき芭蕉の影
啼阿り梅五百本お系五百本た右子綿の
まを秋をあきそふる場あり標のまよを
多々陰より埒ゆひうき阿家犬追抱し
阿うきやうちかしのが次とこまやうき本懐の

山まふつけらまきうき相誇の子合
深井の山立あけあけの法まふきまを
捨は是うの誇好と捨ふ公うき南天の冬庭
あきま隠志うき本賦をうきの庭月のまき
出まよめまきうき知れと法菊作り吹よみ
うきうき牡丹の媒とまき葉の奴とまきの
京よりめしぬ鶴籠の投持と法辻敷と
まきまき犬解玉川の堂をあつめ地犬とまきの

虫名〜根合系合折志り〜の〜り玉帯
去砂をふらしぬ貝殻るた返り〜り月と
暮れとの光をうすめ瓦を多めめる赤露をけく
苔海〜り〜て首を忍ぶ乱糸を拂く嘘
樂を電さる隠居み〜り智ふ女中ま〜り
湖水よう〜り糖ひを脛ま〜り大井の道途
志賀の心〜り〜川日も秋をふりめて八松明
〜り〜尾よ〜りゆめ不樓閣ま〜りの庭よう〜り

夷鳴管〜り〜言ふ牛を電〜り〜ぬの〜り
引〜羊を真〜り〜八朔道の中をま〜り〜り
衣よ湯を鳴〜り〜白免の玉をむ〜り〜り
黄鸝の柱をコトナち〜り〜り名鷲よ楓を催〜り
奇犬よ山家をち〜り〜り〜り〜り
鄧の住居をや〜り〜り〜り〜り
み十三次の鞆鞍をま〜り〜り〜り
山園よ祢さめする男傭の編戸よま〜り〜り

若の〜世杜若咲く〜水色めらる飯を
 何と〜紫の箸を拵く椎の葉乃情り
 鮎と棠樹心のま〜よりぶ〜り瓦田よ留を
 ゆ〜〜起ゆ〜己う中〜かり車馬うまひを
 う〜ぬ〜そ柳の志〜れ〜る如〜〜してまよ
 杖も清あをむすぶよすのあし〜世清あ
 ぬ葉〜〜軟〜〜世〜〜世人の居あや
 い〜心越禪師の記乃棠玄龍うた〜ある

顔今めり〜さ〜も何〜に隠え〜泉の清遠よ
 うそあけ〜跡顔川よま〜ひ〜人暮充み
 着やあ赤形もよ〜を〜すや蹄をむ〜脛を
 志ろめ〜塘よのり色を洞庭西湖よ生れ〜ん
 中〜〜人〜〜を〜解よ〜一〜奉と
 い〜酒の〜う〜ハ〜〜蘇門の赤鳥園をま〜よ
 棟宇士よ礎を設〜〜季吟よ花のり〜の
 新〜きを求〜り琴琵琶の檢校法師風乃

あゝをくをせハハ一節切の名くは汝門
高欄中なるをうりよ吹るくして山の麻必
きくり笑りく名わうかーやうく猿のまきけ
むくゆゆうく蠅かくきくを満く風をー
うよ長安一日の花をんをーして帰るは蝶
志つうくつくく山のあまのひきおほんめくこの法
武門の大敵よくそくあく侍名前んぬ唐土み
をくやんやん之部の賊もまきくくくく

此僧のおさめ流ふは経うも説法をせやくし
何をあゝそ何方いりくもは法中いん

瓢中へ吟

あゝ井く

波うけの物やかさしたの樽をら 天厨子
流るや月も解る秋のすく 婆心子
管とんえてる井のなきさうか 秋風子
あゝよ魔水といんえはくかの月 素白子

目よりくく魚目母々へて牡丹哉
女心よりく高屋の妻を惜むり侍
鶺鴒を氷結しく明けけり
あつちやや齒よ志むらり梨の花
菜の香や物みたるく高屋の妻
あつちの声ひく高屋の妻
衣紋よりく支物別ありさるるをく

素丸
宗瑞
班象
吏仙
乳母
眠我
桃鏡

みしう水や丸く明けく月をく
初言やみよせぬよよ並く
その夢よ出く門おの巨魁の肌
有彩を惜むくや高屋の妻
さきさへしき娘任りり小松の
日よ高屋の妻をく高屋の妻
子合といひく痛く高屋の妻
菜の花や松伸越く横堤

芳堂
持水
鬼書
懐車
是物
高屋
友臨
白翅

雪や日よ〜ちうさ藤屋寮 豆中

帆の風れおの〜さ〜〜〜柳分 木然

戸は〜てもんえん〜く冬の日 雷堂

雪よ吹めの〜こ〜志道まの風 人老

表橋やこ人よ水も借あり 百頁

卯月世や花よん〜る海〜き付 如風

親世よ室生ま〜やん〜き付 莊丹

さく〜ときれ〜る穂より秋立ぬ 新約

あ〜つ〜る約の〜まひ小船うぬ 蕨太

ゆ〜きやう〜らお〜る〜る扇子箱 山幸

心〜つ〜る〜るを〜る〜る梅の香 大坂 田圃

表嵐やち〜よ〜る〜る〜る〜る 北魚

魂擲や十日〜あ〜る〜る〜る〜る 大熱

や〜〜〜と穂よ出〜る〜る〜る〜る 六窓

桂ひく枝柳河くをく思ひゆく
乙兒

管よまづ喜もそ水でおも志海
求光

口十く後のおちり月を
金龜

名月や次平の暗屋も十み城
眠江

音解やちきれくの風のそと
唯我

とくアんくも花の化くる如蝶
玉琴

入おを鳥くく空くちるはく
巴莖

垣石んようつり音あー梅の花
巴有

出はくく船の柳よさくこめりり
吳遠

子をつとくく代をむるん小松系
玉琴

ふくくみ茶も角くむや船白山
五巖

谷陰くみ尺あまりの蕨く肌
鳳足

梅さくやおんをりかか夜
舎梅

平よそりの法息て落くる椿くか
音且

中堂れくくこのそむえ川江戸橋
仙巖

おとこ舟舟船の如くはくく色ハ

うさもすもあつるをきし夜は
きせ

海をよもよもよとつる
常阿

人形や花の小船のあつる山
必親

河をよもよもよとつる夏の月
山幸

うさもすもあつる火の堂のあつる
蓼太

山吹をよもよもよとつる入ぬ星をよもよとつる
連丈

あつるも又後河をよもよとつる初花子
吐月

ゆきもや花をよもよとつる
鳳窟

深きけく首と淵淵や表をよもよとつる
榮室女

蕙好と下戸とんえとつる初松葉
榮陵

雪や雪音をよもよとつる並巨雄
松隣

いつ流日の淵をよもよとつる新やむし淵讀府
蓼且

酒布をよもよとつる相撲とつる
祇什

表充の淵をよもよとつる新酒とつる女
祇之

月がものよもよとつる女命とつる
蓼太

綿織津まをうとくは 常阿

秋まをく 必親

敷やう大や 呉道

月新をまをく 仙簾女

ゆく秋や梢より 鳳足

追うけくあふけをまをく 舍梅

さそふま 秋陽

川まををむく 桃李

あよあを 文尺

そのおりふ 盤古後府

陽まをを三十三 耳得

り姑いへ 葵磨

川柳きく 元子

系市や 白門

まつ年や 雙若

いつちりのをきこふこと一初即景 山幸

川喜や情をこぼしてさき風 文素

徑來は音志つて之河縁の友 阿久

葉橋やか葎のちうしの志をこぼ 父母

洛陽を中よ風こり秋乃風 涼風

友子音唱戸を越こくをこぼ 百孝

雪やこをさよをさるるはつ明石 吐江

虫干や端よあそふ蝶をこぼ 仙路

思ひこころはるるよ出こり冬籠 葵太

田十くく起りて追新麻是が 花明

世をうけてほむるの色や麻の声 神奥

命危のうもろれ川喜虫が ^{主人} 嵐亭

初音よをたこしてるはこが 牛一

そよみねを啼け流の親志をこ 湖堂

苗代下をけりて中流をこぼる川 桃隣

三

ぬききりしと草の下ゆく清き家

真波

ゆきあきくもるもるもるの月

夜光

ゆるりたる早瀬越るりおほる舟

菖也

理かきく旭きりしとくさくさ

松家

まき飛てるももくさくさ清き海

普成

うらひさの雲やきくさくさ音るか

無求

蝶をのりきりしと秋のつゆ

子交

ゆく秋やさしくも春を来二儀

李朝

蓮は香や露の顔紅き花提

獨化

朝夕の十くまにんくさり松の露

^女井野

市へ出く我もきりきり清く水

僧賀

松より海へ雲のつく汐干か

仙凡

吉柳や流波舟の存をくさ

長羽

月の影の何く海救もぬく漁か

蝶爰

初ものよき市人強く時ぬりぬ

^{尾法}也有

卯の花や音とささるるの影さし
八糸

ささるる秋の枯竹藪よ明みりり
曉差

まつまや先見糸の松ひと木
山幸

訪人を名鶴よささるる秋の
夜梧

まうほやうの山屋の花ささる
虚舟

ほささるる月美殿乃あさるる
巨龍

ハヤシと橋もささるる隅田川
三子女

とけさるる寝とんえりり氷室書
楚龍

まの秋や沖よはるの音ささる
音雄

美橋や裾よと風乃をささる
雲丸

名月や鳥のあぬ表もささる
春波

やささるるとまよささるる秋の
漣風

いつさるる氷とささるる川
飛虎

糸は綿織の糸ささるる秋の影さし

新白や砂利もささるる秋乃花
常阿

洛陽の糸ささるる秋の影
必親

糸萩のつゝぬきこほき来くぬ 女 仙麓

海山木よちるよと格のまゝこゝろ 女 鳳足

ゆく秋や松きく泣くを伴白次 吳莖

よせあつて節と節あり麻の声 月伴

ひらくよと敷く泣くむや冬乃梅 明海 如羽

笠横より萩こそあはれ冬月 蝶狂

入る海舟の細さや麻れこゝろ 花口

妻の目よまことのせとさうぬ焼物 女 對賀

麻れ声妻持まゝと思ひたり 鬼秀

ゆく駒の足よまのりる如蝶くぬ 甚道

初丁やよめとてまよふ一とら 玄長

山よりをも湖あう笑へ鳴乃返 女 菜根

松草やみほひこほり神たす 女 菜根

山よりけて海へ吹くいら唇志声 林江

稲妻を待つて越り見木橋 如賀

曉露やまじくを海を過る舟の糸
 鳥曉
 朝顔の志は心側くはらへり
 後白
 丁度時田も目よんて床を
 一語
 かう目よんて流るを江や猫の意
 舞蝶
 春もや下書法くる柳の形
 斑石
 炭壺やりりよはけふ山くま
 嵐立
 ゆく春やん送る障子明か
 靛牛
 駒多や時斗りしやく抱
 活丈

管や碁の音成る志ふり
 少年
 千とあるんせぬ月夜の芭蕉が
 菟捕
 名月やこころ新の松そと
 阿言

菜の花れきくもる居るや時序
 下毛
 名月やそとる蔭の草あはり
 出井
 松よいふ雑花ほろや春の音
 伊豆
 二階くそ扱くと清あうれ
 左江
 春石
 投茶
 仙風
 桃司

雪のふりこけけき 芙蓉系 を白 此君

いさよりや 雲のきさく あき登、 菊平

あつまる氷りしとく 寝浦系、 其時

立るる松の裾 浅やすれ系 武蔵 和文

うけしちうや 夜の花はうり、 死外

長季の葉もあらしき お模 石盤

捨るものむろふやうたり 生橋、 魚尺

屋敷入や 鏡のうけもまゝ、 明は、 燕汀

去る葉や 雪解のあけより 新、 仙茶

欠落の三里より 二日冬うれ、 山秀

藤の花や ちれあま里のうり 池川 武蔵 政系

秋をむろぐ系も果るす 時あふ、 山史

伯備の伽藍 祓うひや 九輪系、 曲枝

解法とや 簀よ一輪の白牡丹、 葦戸

白妙をみしりし 女 其者の友 仙 簾

あはれや けり入 奥と 麓と 吳 莖

糸萩のいとちいつこ夕あり	常阿
笹の葉まつりる音あり萩の音	鳳足
鳴子いしひまりいしはり小萩の肌	五蔵
冬牡丹蠟のすすみの色いん	必觀
いんまやちよまふりる履の跡	女 交音
雪やハ族れまのいりり	采衣
鳥羽社の跡先んえき草葎	子得
極あまれ袋の中や枇杷の音	鏡平

改

此や満ちる集つるまはらひしほけ
 糸にいとちをふりてはるる
 人いしはりもねこう満ちてはるる
 すまらるるまはらひきつはらひはらひ
 人いしはらひもねこう満ちてはるる
 喜れいしはらひもねこう満ちてはるる
 何ら六の前乃花を月を詠し

探るまじき中、養主の潤色をさひひえて
法をよき教の教化をぬりぬり水を
校おくりおきしん此友遠方より
さしるまじきと様まじりて
事志うり干時明和の邦と春
之内其深亭必親述

秋中

栄来

書

畫耕夜讀